

## 挑戦者たち

### 13 人で人づくりから始めた九州松下電器

九州松下電器\*は1955年（昭和30）12月、資本金1億円で福岡市に設立された。遊休化したゴム工場の建物を地域の活性化のために活用してほしいという、福岡県と福岡市からの要望を再三にわたって受けた創業者が、「産業を通じて九州の発展に貢献する」ことを決断したのであった。

創業者から、この会社の運営を全面的に任せ、初代社長となった高橋荒太郎（当時、松下電器専務）は、取締役役に抜擢した33歳の青沼博二（後に九州松下電器社長）に全権限を委譲し、12名の部下とともに九州に出向させた。全員が20代から30代の若さであった。

青沼は、1934年に開設された店員養成所の第一期生であり、当社の経営基本方針を体した仕事を任せるには最適の人物だった。「高橋社長から創業当初の3年間は赤字を覚悟して人づくりに専念するよう言われました。人さえ育ててくれば仕事も金もついてくる——と」

初年度は新卒者100名を採用し、この教育訓練から始めた。電力会社から注文のあった、月に1,000台の変圧器の生産を通じた訓練であった。20～30名のチームを編成し、2回にわたって大阪の松下電器の工場へ2カ月間実習に行った。工場の機械設備も、全員が油にまみれ、凶面と見比べながら取り付けした。誰もが未熟ながらも目を輝かせ、一人前の責任が果たせるよう必死に作業に取り組んだ。

続いて小型モータの生産を始めた。モータの技術力を身につけることは、将来の事業展開にとって極めて重要なことだと考えたからであった。新しい事業を手がけるといっても、協力工場から育てていかなければならず、最初の1～2年間は幹部が工場を訪れては泊り込みで指導にあたった。仕事は着実に増えていったが、借入金の金利や償却、養成中の社員の人件費などがかさみ、毎月末は資金の運用に苦しんだ。経費は徹底して抑え、治工具や事務用品の購入も一切停止。壊れた治工具は自ら修理し、インク壺に水を入れて使った。しかしそこには暗さはみじんもなかった。誰もが「九州に貢献する」という創業の使命を自覚して、将来の発展に夢をはずませていた。



1957年（昭和32）  
九州松下電器を視察した際の創業者（前列中央）と  
高橋荒太郎専務（前列左から2人目）



1967年（昭和42）福岡本社工場を視察した  
創業者に製品の説明をする青沼社長（左）

全員の努力の甲斐あって、小型電気掃除機やカークリーナー、電気鉛筆削り等、小型モータを応用した新製品を次々と開発し、事業を拡大していった九州松下電器は、創業6年目の1961年には過去の累積赤字を一掃、7年目からは配当を開始するようになり、九州を代表する企業へと成長していった。

\*現AVC ネットワークス社